

大毛池田遺跡

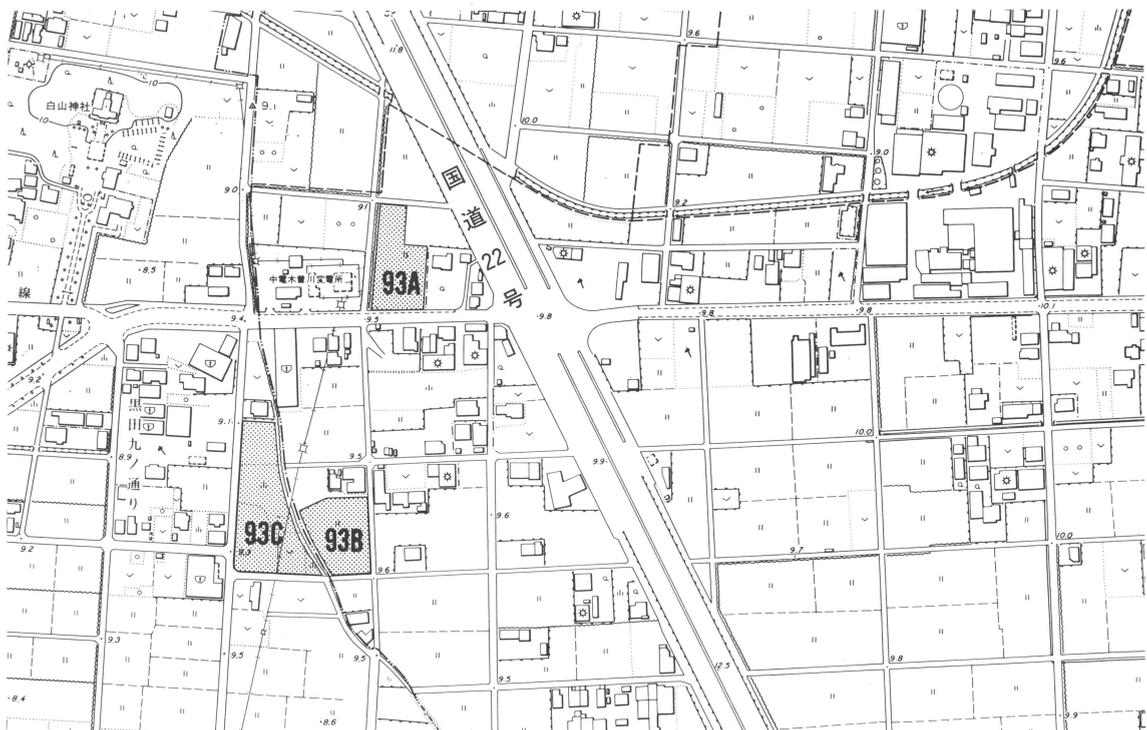
調査の経過 大毛池田遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曾川町にかけて所在し、木曾川によって形成された標高9 m前後の自然堤防上に広がり認められる遺跡である。

発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴うものであり、日本道路公団より愛知県教育委員会を通した委託事業として、本年4月より7600㎡をA～Cの3調査区に分割して調査を実施した。

調査の概要 検出された遺構と遺物は、古墳時代前期（I期）、古代（II期）、中世（III期）、戦国から近世（IV期）の4時期に大きく区分することができ、概ね1層：耕作土、2層：暗灰黄色シルト、3層：暗灰黄色シルト、4層：灰褐色粘土、5層：暗紫褐色粘土、6層：灰オリープ粘土、7層：灰褐色中粒砂の順に堆積する基本層序を確認した。概ねIIからIV期の遺構は2層上位で、I期の遺構は5層上位で検出した。

調査の結果、以下の点は注目することができよう。

- ① 現状において県内最古と考えられる古墳時代前期の水田跡を広大な面積で確認できたこと。
- ② II期に属する遺構として、基壇を有すると考えられる建物跡を検出し、同時に鎮壇具と推定される銅椀・小形壺型土器を確認したこと。(服部信博)



第1図 調査区位置図 (1/5000)

**A区I期の
遺構・遺物**

今回の調査では、調査区東半部分下層から古墳時代前期の水田遺構を良好な形で確認することができた。当該時期の水田遺構の検出例としては県内では最古の例となるきわめて重要な発見となった。

水田跡は、最初に南北方向に延びる大畦畔の高まりを検出し、次いでこれに沿って整然と配置された長形状の小区画水田を確認することができた。

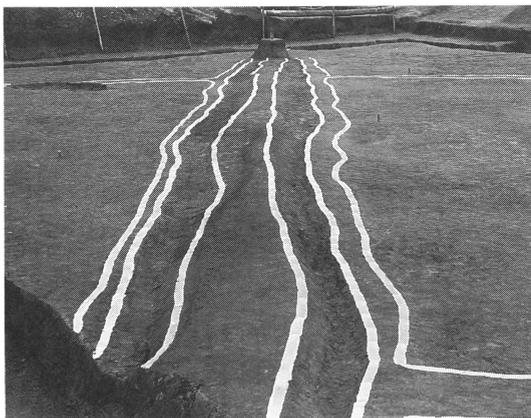
大畦畔は幅が80cm、高さが18cm、断面は台形状を呈し、両側には取水・排水に利用されたとと思われる浅い溝を伴っていた。この大畦畔は、小畦畔とは規模、機能とも明らかに異なっており、また、この大畦畔に規制される形で小区画水田が整然と配置されている点よりみて、水田を構築する際、最初の段階に設定されたことが予想される。

小畦畔は平均して幅30cm、高さ5cm未満で所々が低く途切れ、水口が設けられていた。水田一区画の規模は、最大（ST07）が16×8m、最小（ST10）は6×3mとかなりばらつきがみられるものの、大畦畔から遠ざかるにしたがって面積が小さくなる傾向が認められた。

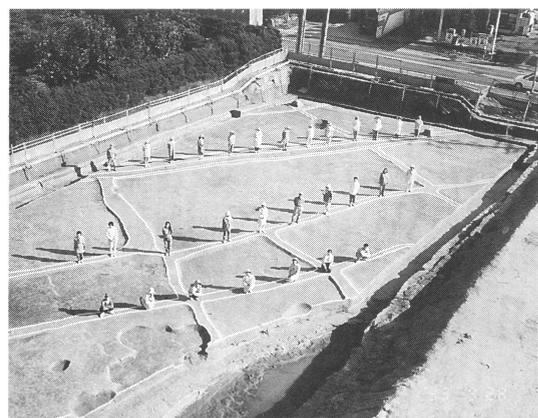
なお、水田経営にとって最も重要な水回しの問題については、北方から南方へ緩やかに傾斜する傾向は認められたが、判然としなかった。

水田からの出土遺物は土師器台付甕が大半であり、僅かに高杯の小片が1点みられた。遺物は畦畔のコーナーに近い地点に集中する傾向がみられ、ST06からは「く」字甕、S字甕がほぼ一個体のまとまりで、ST10、13の遺物集中地点でもS字甕口縁部片が数個体出土した。いずれも廻間Ⅲ式期後半に比定することができ、比較的存続期間の短い水田と想定できよう。また出土土器の器種、分布地点に限られ、遺物集中地点の周囲に炭化物の広がりもみえることから水田耕作に関わるなんらかの祭祀が行われていた可能性も考えられよう。

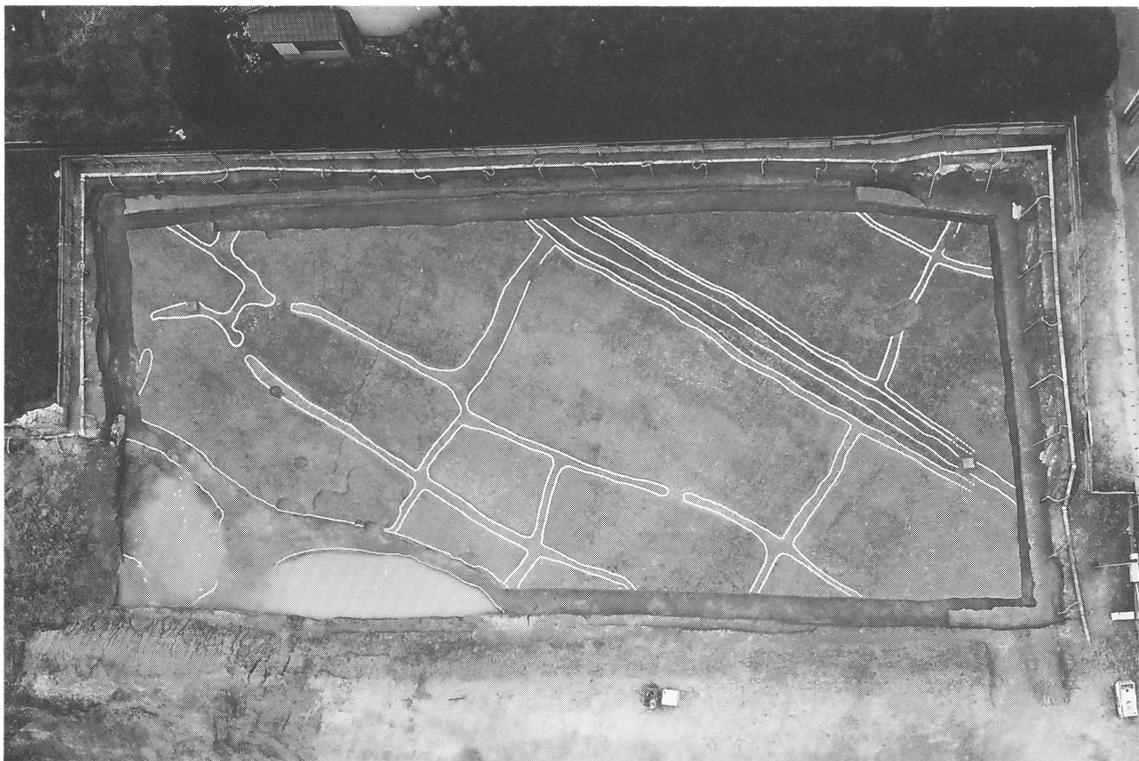
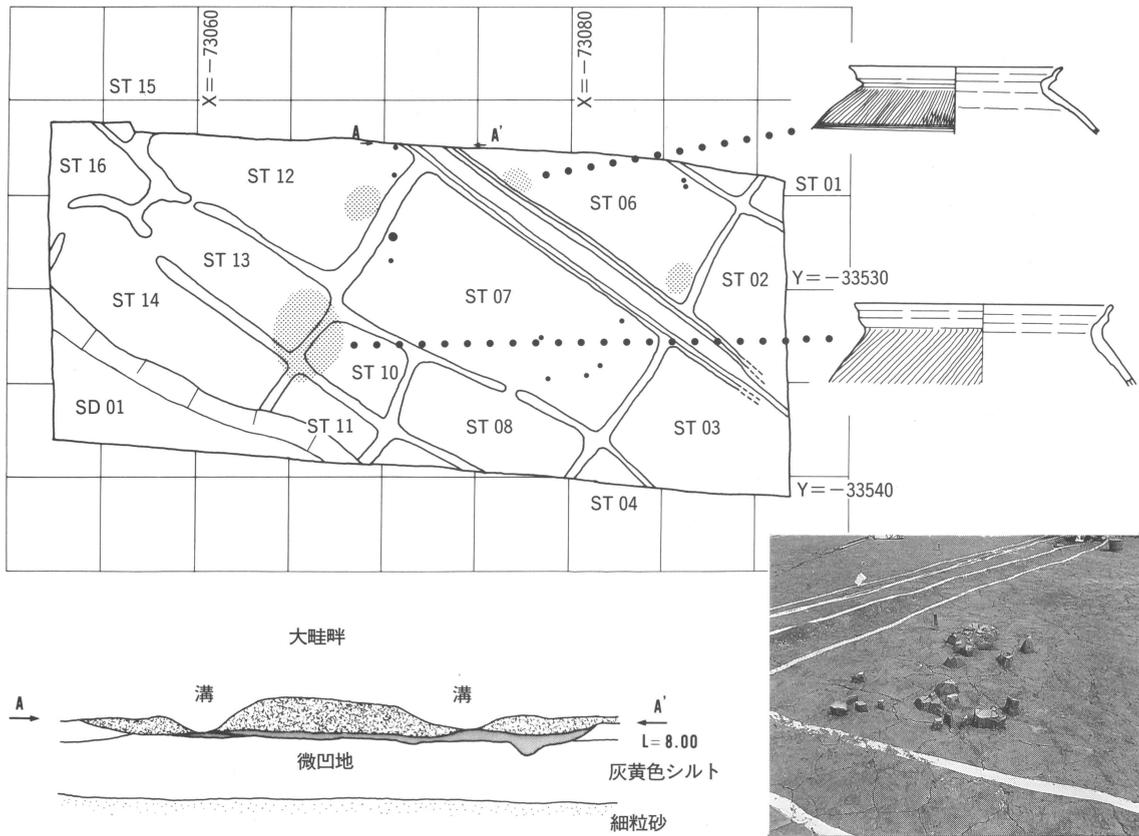
なお、B・C区下層においても古墳時代前期の水田遺構が確認されており、A区水田との関連が注目される。（北條真木）



水田大畦畔（東から）



水田全景（西から）



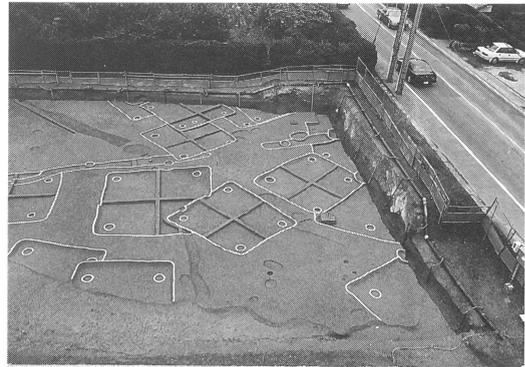
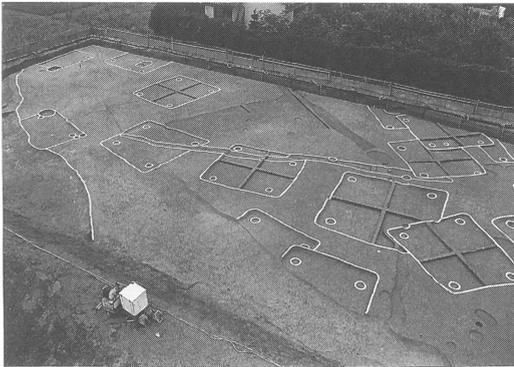
水田全景

II～IV期の遺構

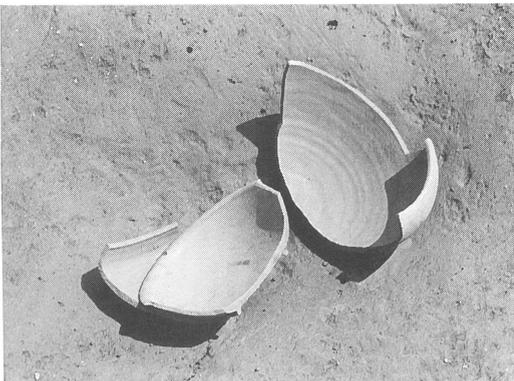
II期の遺構としては、調査区東半部分において竪穴住居跡19棟を検出した。すべて方形プランを呈していた。平面形の軸線方向からすると二つのグループに大別でき、一つはN-0°-Eを中心とするもので10棟あり、もう一つはN-40°-Wのもの9棟である。平面形の一辺の長さは、前者のグループが約4.5～5.6mで、後者のグループが約3.8～4.8mとなり、平面規模にも相違がみられる。S B13からは火を受けた丸石が出土し、S B14では炭化物を含む小土坑を確認したが、かまどなどの遺構は確認できなかった。遺物は少量であったが、S B12・13・14から8世紀後半から9世紀前半の須恵器・灰釉陶器が出土している。

III期の遺構は調査区西半全体に展開していたが、主要なものとしては溝S D01・03があげられる。S D01は幅約5m、北端では9mと広がり、最深部では1.1mを測る。S D03は幅約1.6m、深さ約0.4mで、S D01から西側に約8mの間隔をおいて平行に走っている。これらの溝からは13～14世紀に相当する灰釉系陶器やまれに輸入陶磁器などが出土しており、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

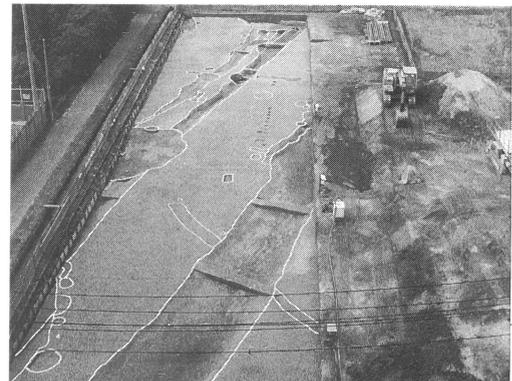
IV期の遺構としては調査区北端の土坑S K06があげられる。深さは1.1mで、埋土からは一気に埋めた状況がうかがえる。また、検出面より0.6mほど下層の青灰色砂層からは、建築部材の転用材と考えられる木組が出土した。 (今西康二)



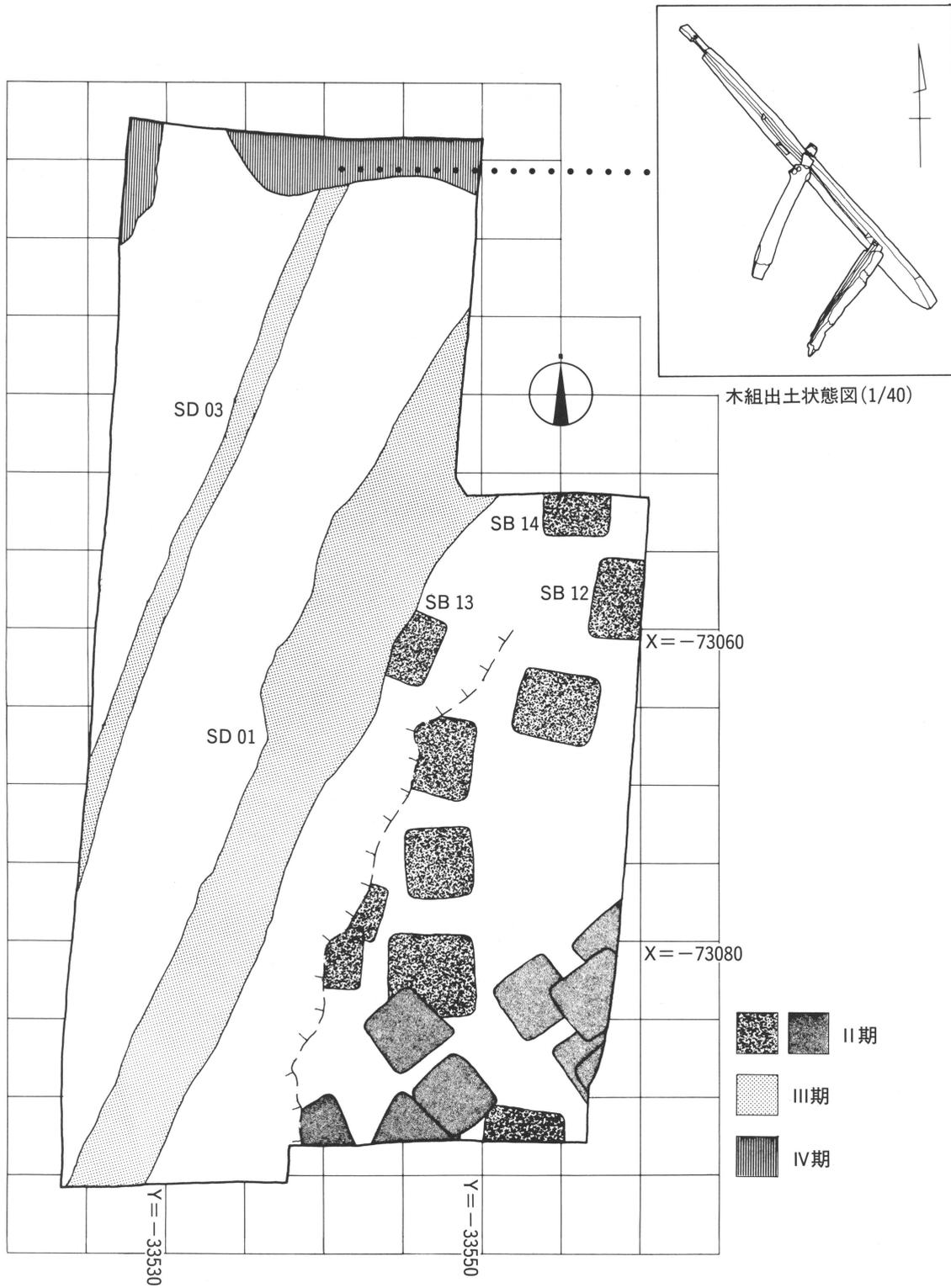
II期 竪穴住居 (西から)



S B12遺物出土状況



III～IV期遺構全景



第3図 A区II~IV期主要遺構配置図(1/400)

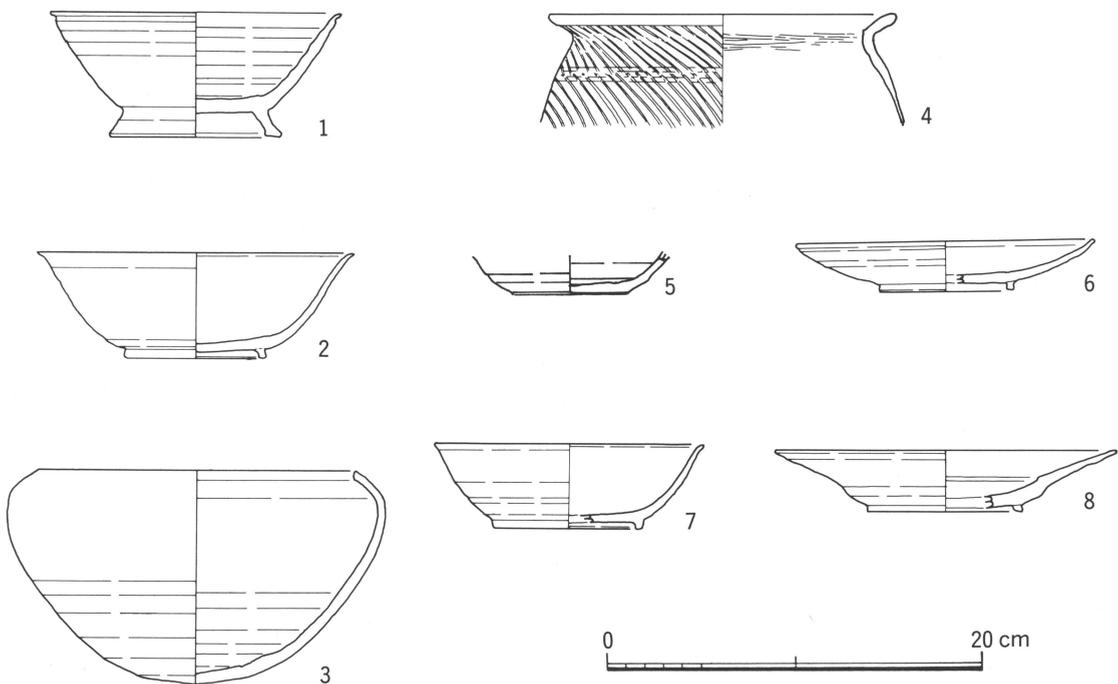
II～IV期の遺物

調査区の大部分が近世以降の水田によって大幅に削平され、遺物包含層の残存状況がきわめて悪く、遺物の出土総数は全体的に少なかった。検出された竪穴住居のうちS B12、13、14からは8世紀後半から9世紀前半に比定される良好な資料を得ることができた。

II期の遺物としてはS B12中央から、K-14号窯式期に併行する灰釉の椀と若干時期がさかのぼる可能性が考えられる須恵器鉄鉢がセットで出土した。鉄鉢は胎土が精良で淡い青灰色を呈し、体部下半部にヘラ削り調整が施されている。S B13からは、高台部分が高く、口縁外面に断面が丸みを帯びた沈線をめぐらす特異な形の須恵器杯や墨書のある底部糸切りの須恵器杯が出土した。S B14からは土師器の甕、灰釉陶器の皿などが炭化物を含む小土坑から少量出土している。

III期の遺物は概ね調査区全体で検出された。主要な遺構と考えられるS D01、03からは若干の須恵器甕、壺、杯、灰釉陶器の椀、皿や磁器片などが混じるものの、13～14世紀に相当する灰釉系陶器を中心とする遺物が出土し、なかには底部に墨書が施された資料もみられた。

IV期では、S K06から、主に灰釉系陶器椀、皿類と大窯II期以降に属すると考えられる天目茶碗や播り鉢などの施釉陶器が出土した。また、この土坑の最下層からは建築部材の一部とみられる木組が出土した。ほぞを用いて組み合わされているが、その他にも数ヵ所みぞやほぞ穴があり、廃材を利用した転用材と思われる。(北條真木)



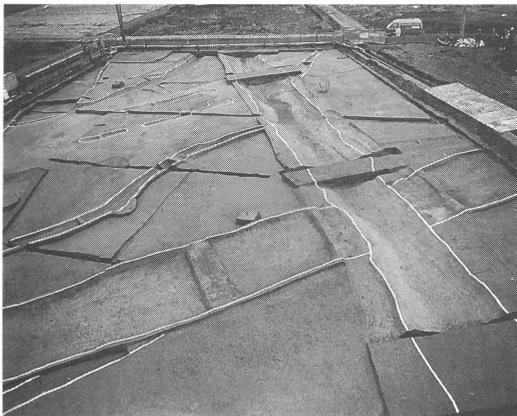
第4図 II期出土遺物 (1. 5 : S B13、2. 3 : S B12、4. 6 : S B14)

B区の遺構 I期の遺構としては、溝を2条確認した。S D14は調査区の南端から東に向かって弓状に延び、幅は1～2m、深さ50cm程度でU字形の断面形態を呈する。埋土は暗灰黄色シルトで、遺物としては須恵器甕が出土した。S D18は調査区の北端から南西へ延び、自然流路(N R01)に接する。幅は60～90cm、深さ30cmほどでU字形の断面形態を呈し、須恵器が出土した。また調査区の下層では、A区と同様に古墳時代前期の水田跡が確認され、2条の溝とそれに規制される形で整然と配置された小区画水田跡が検出された。

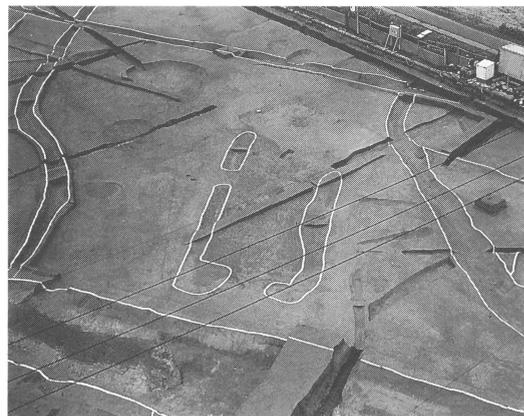
II期では、溝と基壇状の施設を持つ建物跡(S X10)を確認している。S D10は調査区の南東から北西へ延び、S D14と接する部分で屈曲する。幅は溝の東端が調査区外のため特定できないが、6m前後と推定される。深さは50cm程で皿状の断面形態を呈し、須恵器甕が出土した。S X10は、4m×12mの長方形の平面形態を呈し、調査区の下層で検出された自然流路かとも思われる溝の上に黄褐色粘質シルトの盛り土を行い、基壇状の施設を形成し、周囲に溝を配置し区画した建物跡と推定される遺構である。この区画の上面から鎮壇具と考えられる須恵器の小形壺、および銅製の椀蓋が出土している。また、周辺からは中小のピットが多数確認された。

III期の遺構は調査区全般で認められたが、主要な遺構としては、S D02・08とS K16があげられる。S D02は調査区の西半を北西から南東にかけて貫き、出土遺物からみて13世紀に掘削され15世紀には廃絶したと考えられる。幅4～6m、深さ70cm程であり、下層では須恵器、灰釉陶器など古代の遺物も多く含みながら13世紀代を中心とする灰釉系陶器が出土し、上層からは15世紀代の陶磁器片が出土している。S D08は幅約50cm、深さ25cmを測る。U字形の断面形態を呈し、埋土は灰色シルトで、遺物は13世紀代の灰釉系陶器主体であった。S K16からは灰釉系陶器が出土した。

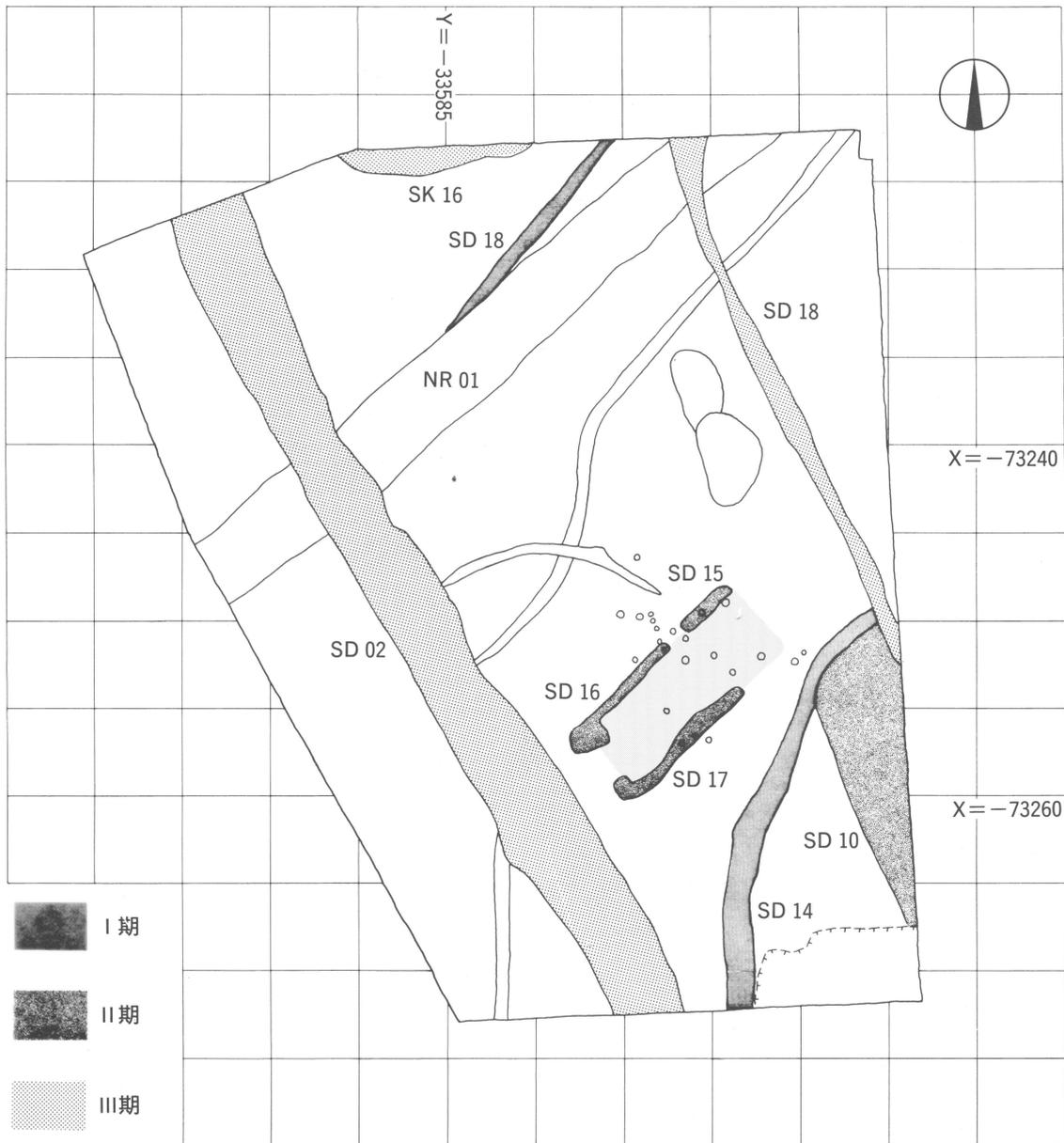
IV期については、調査区の北東隅で、現代の水田耕作土、床土下から近世以降の水田面が確認された。(黒田哲生)



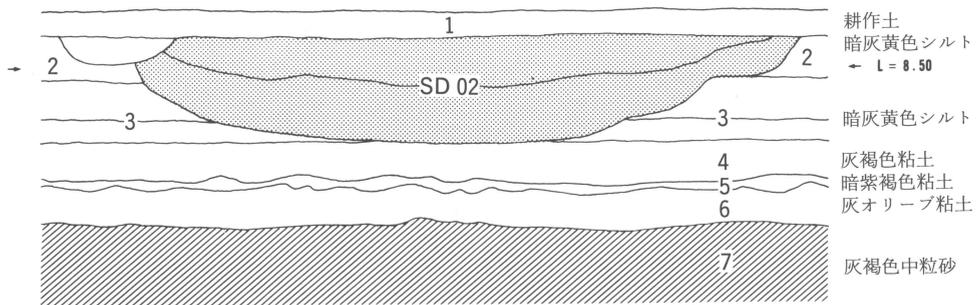
全景 (北から)



S X10 (西から)



第5図 93B区遺構配置図 (1/400)



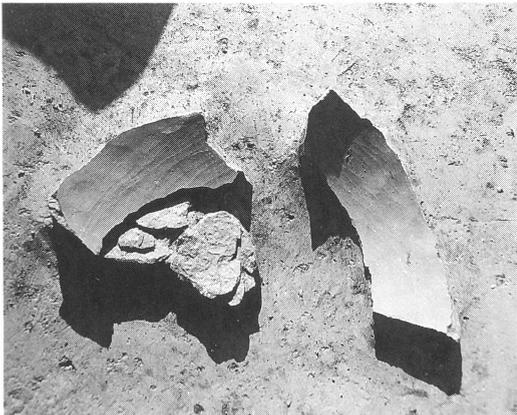
第6図 93B区基本層序 (1/50)

B区の遺物 I期の遺物では、須恵器大形の甕がS D14から出土している。遺物は淡い青灰色を呈し、胎土は緻密で精良だが剥離するように割れ易く焼成はあまり良好ではない。他に包含層中より、須恵器高杯の脚部などが出土している。

II期では特筆すべき資料としてS X10より銅椀蓋の破片2点が出土しており、同一個体と考えられる。これは天井部を欠くものの復元すると口径11.6cm、残存高1.6cmとなりやや小形の感がある。体部中位に稜をもち、口縁端部は鋭く屈曲する。これとセットになる椀身は発見されなかったが、後出の緑釉稜椀のモデルとなっていく金属器の一例として貴重な資料といえよう。またS X10からはO-10号窯式期に併行すると思われる須恵器の小形壺などが出土している。小形壺は口頸部を欠損しており、意図的に欠いた可能性も考えられる。これらは銅椀とともに鎮壇具としての性格を推定することができよう。

そのほかII期に属する包含層からの出土遺物として、K-14号窯式からK-90号窯式期にほぼ併行すると思われる灰釉陶器の椀、段皿、耳皿などがあげられる。

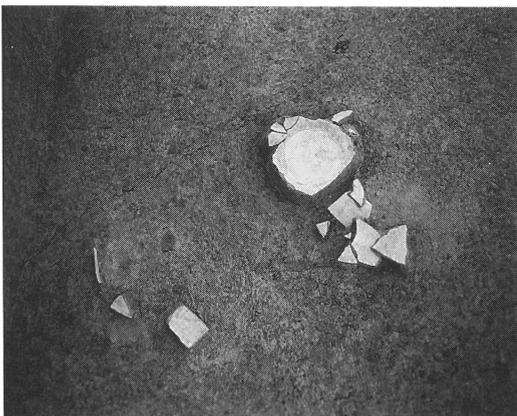
III期の遺物は13～14世紀に相当する灰釉系陶器の椀、皿が多数出土し、他に伊勢型鍋、輸入陶磁器、土錘などが出土している。 (北條真木)



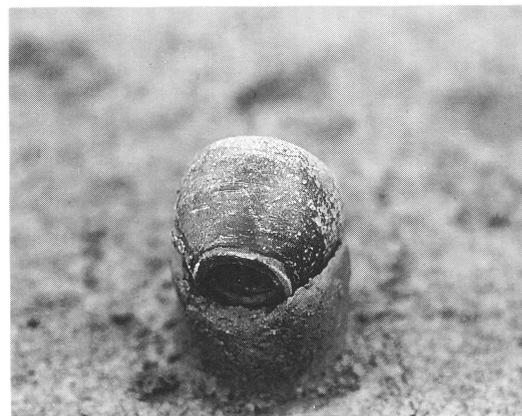
S D 14 須恵器甕出土状況

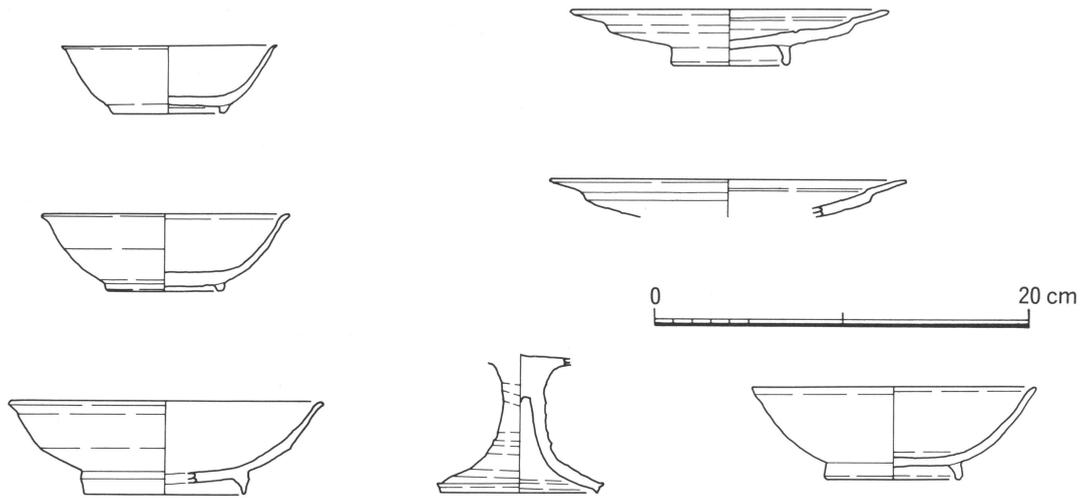


銅椀蓋片出土状況



S X 10 遺物出土状況





第7図 II期出土遺物

まとめ 今回の調査ではI期（古墳時代前期）～IV期（戦国から近世）の遺構・遺物を確認することができた。以下、今回の調査で判明した点を各時期別にまとめておきたい。

I期 大きな成果として、現状において県内最古の事例となる水田遺構を広大な面積で確認できたことが挙げられる。今回の調査では特徴的な大畦畔を検出し、これを基本とした計画的な小区画水田配置のあり方について認識を深めることができた。しかし、水田経営において最も重要な水回しの問題については、十分に解明することができなかった。また、これらの水田経営に携わった直接的な集落の存在も不明である。今後の検討課題である。

II期 検出された遺構は概ね奈良時代および平安時代に分けられる。前者では基壇状の施設を有し、銅椀・小形壺型土器など鎮壇具と推定される特殊な遺物を出土した建物跡を検出することができた。また、後者では2グループに分かれる竪穴住居から構成される居住空間を確認した。遺跡の周辺は古代大毛郷との関連が注目される地域でありながらも具体的な史・資料に欠き、その実態は不明な地域であった。これら新たに確認された遺構・遺物が直接的にそれとつながるとは言えないが、尾張北西部の古代史を解明するうえで貴重な発見となった。

III期 A・B区ともに幅5m以上の溝を検出したが、その性格、掘削の目的などについては判然としない。

IV期 A区において土坑状の落ち込みを確認し、廃材を利用した木組を検出したが、他に明瞭な遺構はみられず、その展開については不明な点が多い。（服部信博・北條真木）